東京都市大学共通教育部紀要　抜刷　2021 Vol.14

How Did the School Respond to the Corona Epidemic ?：
Based on a Case Study of an Elementary School in Shinagawa Ward, Tokyo

学校はコロナ禍にいかに対応したのか
―東京都品川区立小学校の事例をもとに―

井上　健
滝渕 正史

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.14, 2021

学校はコロナ禍にいかに対応したのか
―東京都品川区立小学校の事例をもとに―

人文社会科学系　教職教育部門　井上　健
品川区立小学校校長　滝渕 正史

はじめに

2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルスは世界中で猛威を振るい、2021年2月現在、累計感染者数は世界で1億1103万人、死者数は245万人を越えた[*1]。ようやく日本でも、医療従事者へのワクチンの接種が始まったが、ウイルス感染症が終息する見通しは立っていない。

本稿は、品川区立第二延山小学校滝渕正史校長へのヒアリングをもとに、普通の公立学校がコロナ禍にいかに対応したのかを事実に即して整理しようとするものである[*2]。井上の質問に滝渕が答えるかたちで、まず、2020年早春の「一斉臨時休校」を振り返り（第1章）、次いで、懸案となった休校中の家庭学習への対応（第2章）と6月の再開直後の学校の状況（第3章）を振り替り、そして、コロナ禍のなかで、教職員がどのような思いで教育活動に取り組んできたのか（第4章）を明らかにながら、いわゆる「Withコロナ、Afterコロナ」時代の学校教育を考える一助としたい。

第1章　突然の一斉臨時休校

Q1-1（井上）：今回のヒアリングの趣旨は「コロナ禍」に学校がどのように対応してきたのかをさまざまな角度からおたずねしながら、「Withコロナ、Afterコロナ」における学校教育のあり方を考えようということにあります。まず、第二延山小学校がどのような学校なのか、学校が立地する環境や児童の様子など、簡単に紹介いただけますでしょうか。

A1-1（滝渕）：本校は昭和3年に開校し、2年前に90周年を迎えました。こ

の辺りは、関東大震災後に複数の鉄道が通り、急速に宅地化が進みました。学区域はほぼ住宅地で、品川区内でも落ち着いたエリアです。校舎は建て替えて15年目ですが、今でもきれいで、モダンな建物です。入口を入った正面が4階まで大きな吹き抜けになっていて、この空間が学校のシンボルでもあります。全校児童数は約650名。各学年3クラスで約100名という規模です。私は着任して5年目になりますが、穏やかな児童が多く、授業中はもちろん、全校朝会など大勢が集まる場面でも静かに話を聞くことができます。15年以上前から「異学年交流活動」に取り組んでおり、その成果なのか、子どもたちは学年を超えて仲が良く、特に高学年の優しさを感じます。

Q1-2（井上）：今回のコロナ禍で、落ち着いた住宅街の穏やかな子どもたちがどんな影響を受けたのかが気になりますが、まず、学校が「休校」になった前後の状況からお話いただけますか。一連のコロナ対応は、2020年2月27日に安部首相（当時）が要請した「全国一斉臨時休校」が契機になったと思われますが、学校現場はこの要請をどのように受け止め、また、校長としてどんなことを考えていらしたのでしょうか。

A1-2（滝渕）：「休校」の要請は職員室でも大きな話題となり、27日の夕方、首相の会見を教職員と一緒にテレビで見ました。その時は、コロナウイルスの脅威が身近に迫っている実感はまだありませんでしたので、教育活動が強制的に閉じられるような違和感がありました。ただ、学校は公教育の機関ですので、要請には従わざるを得ず、突然、長い春休みに入るような感じでした。6年生の3月は、卒業に向けて一番充実した活動ができる時期なので、それを保証してあげられない申しわけなさと、その姿を5年生に見せられないという残念な思いがありました。

　他方で、どの学年も、年間の学習はほぼ終えていた状況でしたので、教育課程上の問題はそれほどなく、休校になっても、復習プリントなどで対応できるだろうと考えていました。今、振りかえると、「そのうちに、休校も解除されるだろう」と楽観的な見方があったと思います。

Q1-3（井上）：突然の「全国一斉休校」でしたから、教育委員会からの指示が相次ぎ、校長会などでもさまざまな議論があっただろうと推測いたしますが、「休校」の経緯や事実関係を簡単に整理していただけますでしょうか。

A1-3（滝渕）：1 月末の段階では、国や都から発出される文書、そして、それを受けた品川区教育委員会からの指示は「中国からの帰国者への対応」や「感染防止対策」などが主なものでした。2 月 26 日に、区教委の指示に従って、学校から「3 月中の校外学習の中止」と「行事の規模の縮小等」の通知を保護者あてに出しています。

全国一斉休校の要請がなされた翌日の 28 日に、品川区教育委員会から区立学校の方針として、「3月2日（月）は午前授業」、「3月3日（火）から春季休業日まで臨時休業」、「卒業式・修了式の実施」、「休校中は家庭学習の課題を出すこと」などの指示などがあり、3 月 2 日付で学校から家庭に通知をしました。さらに、「すまいるスクール（校内にある放課後対策事業施設）」からも、やむを得ない場合の学童保育の利用に関する通知が出されました。

Q1-4（井上）：春先は、新型コロナ感染症についてまだよくわからない状況でしたから、学校から保護者に文書を出すにしても、さまざまなご苦労があったと拝察いたします。保護者に通知する文書は学校が独自に作成するのですか、それとも、区教委から「ひな形」が例示されるのでしょうか？

A1-4（滝渕）：休校期間中、学校から保護者に「卒業式の対応について」、「荷物の持ち帰りの実施について」、「校庭・図書室の開放について」等の通知をしましたが、それらは区教委からの指示をベースに学校ごとに作成をしています。何か問題がある場合には、校長会として区教委に問い合わせ、課題解決に向けた調整をして、各学校での文書作成につなげていきました。3 月の中頃には、校長会として新年度のあり方（当時は学校再開が前提でした）について、区教委の判断を求め、働きかけたりもしました。そうした段階を踏んで、3 月 18 日に「3 月 25 日の登校について」、19 日には「入学式の実施について」、「始業式の実施について」という文書を、学校から保護者に通知しています。

第 2 章　休校中の家庭学習

Q2-1（井上）：その後、新年度が始まったばかりの 4 月 7 日に「緊急事態宣言」が出されました。結果として、4 月 6 日に入学式と始業式をしただけで、5 月末まで2ヶ月間にわたる「休校」という前代未聞の事態になったわ

けですが、この頃の学校はどのような状況でしたか。校長として一番、頭にあったのはどんなことでしたか。

A2-1（滝渕）：4月1日の段階では、品川区教育委員会は、7日以降をどうするか決めかねていたようですが、2日には「4月7日から5月6日までの休校期間の延長」が決定されました。学校からは、3日付で保護者に文書を出しました。さらに、7日の「緊急事態宣言」を受け、区教委から学校に対して「期限未定の休校措置であること」「児童の家庭学習」「教科書の配布」「児童の状況把握」等の指示がありました。さらに、4月8日から教職員は原則として「自宅勤務」となりましたので、学校には管理職と事務職員、日直教員と用務主事しかいない日々が続きました。

　そうした前代未聞の事態が続き、正直なところ、何から手をつけたらよいかわからないような状況でしたが、校長として、保護者と児童に対して「何をどうすればよいか」が明確になるメッセージを出し続けなければならない、という使命感のようなものがありました。その手段は、現実的には「メール」しかありませんので、新1年生の保護者に対しても、1日でも早くメールアドレスを登録していただくよう働きかけをしました。また、保護者に少しでも学校の様子を伝えたいという気持ちから、着任以来発行している「校長通信」の発行回数を意識的に増やしていきました。例年の倍くらいの号数を発行したでしょうか。特に、気になっていたことは「家庭学習」です。新年度が始まっても、「休校」が続き、「学年開き・学級開き」さえできていないので、何をどのように進めていくかに本当に悩みました。

Q2-2（井上）：今、「家庭学習」という話題が出ました。学校としては、休校期間中であっても、「子どもたちに学力をつけること」を考えていかなくてはならないわけですが、具体的には、各家庭でどのように学習をさせようと考えられていたのでしょうか。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、ICT環境が整っている諸外国や私立学校などでは「遠隔授業」に切り替えられましたが、日本の公立学校の場合、一部の自治体を除いて、ICT環境が十分には整っておりませんので、「遠隔授業」をしたくてもできない状況だったと聞いております。第二延山小学校はどうでしたか。

A2-2（滝渕）：4月の始めは、実質的にまだ何もスタートしておらず、保護者への通信手段もメールしかない中で、「新しい教科書」と「復習プリント」を

一緒に渡した程度でした。教職員が自宅勤務となったことも、家庭学習をどう進めていくかを考える上では厄介な状況でした。配布した「復習プリント」は数日で終わってしまい、「何か工夫をしてほしい」という保護者の声が寄せられました。残念ながら、オンラインで授業をするような環境は全く整っていませんでしたし、児童の様子を確認しようにも、学年で日を分けて、担任が電話をかけ続ける以外の方法がない、というような状態でした。

他方で、区教委からは「教科書の内容を家庭学習で進めてほしい」との指示があり、何とかしなくてはならないと悩み続け、たどり着いたのが【一週間の時間割】と【毎時の学習の進め方】を提示して、各家庭で学習に取り組んでもらう、というスタイルでした。

Q2-3（井上）：いろいろなことがはっきりしない中でしたから、ご苦労も多かったことと拝察いたします。その【一週間の時間割】と【毎時の学習の進め方】を核とする「家庭学習」のスタイルについて、もう少し、お話しいただけますでしょうか。

A2-3（滝渕）：4月の後半から、学校のホームページに家庭学習のための【一週間の時間割】と【毎時の学習の進め方】をアップし、メールで保護者に知らせる、という方法で進めました。

資料1は、5年生の5月第1週の【一週間の時間割】です。学校の授業は一日6時間程度ですが、それを参考にしながら、子どもたちが毎日、規則正しく、健康な生活ができるように、また1週間でどこまで学習すればいいのかの「めあて」を持てるように、一日分を4時間として、同じ学年の教員たちが相談してつくったものです。

次の資料2は、【一週間の時間割】にある「5月14日の2時間目の算数」の【毎時の学習の進め方】です。

本校は、7年前から「教えて考えさせる授業」[*3]に全校で取り組んでいます。この「教えて考えさせる授業」は、簡単に言えば、①まず、今日の授業で大事なことを教員がしっかり教える、②子どもたちが教わったことを言葉にして確認する、③教わったことを使って、友だちと難易度の高い問題解決にチャレンジする、④今日の授業の学習を振り返る、というサイクルで進めていくもので、教科や単元（内容）に関わらず、どの授業においても基本的には同じです。

資料１　【一週間の時間割】の例（５年生、2020 年５月 11 日～15 日）

5年生学習予定表

5月11日（月）～5月15日（金）

5年生

第二延山小学校
担任　伊藤賢司　高橋真美
三宅功起　早川美樹

	11日（月）	12日（火）	13日（水）	14日（木）	15日（金）
1	社会	理科	算数	国語	国語
	日本の国土と世界の国々	天気の変化	整数と小数（計算ドリル）	漢字の成り立ち	春の空
2	算数	国語	国語	算数	算数
	整数と小数	なまえつけてよ	漢字の成り立ち	体積	体積
3	国語	算数	英語	図工	体育
	なまえつけてよ	整数と小数まとめ	アルファベット	かん黄～風神雷神図屏風～	ワンミニッツエクササイズ
4	体育	市民科	体育	社会	理科
	ワンミニッツエクササイズ	みんなの安全と生活	ワンミニッツエクササイズ	日本の国土と世界の国々	天気の変化
モ	ことのはノート	ことのはノート	ことのはノート	ことのはノート	ことのはノート
	象・象・算・技	術・視・興	漢字テスト練習（任～興）	漢字テスト（任～興）	許・可・刑
振り返り	生活ノート	生活ノート	生活ノート	生活ノート	生活ノート
	一日の振り返り	一日の振り返り	一日の振り返り	一日の振り返り	一日の振り返り

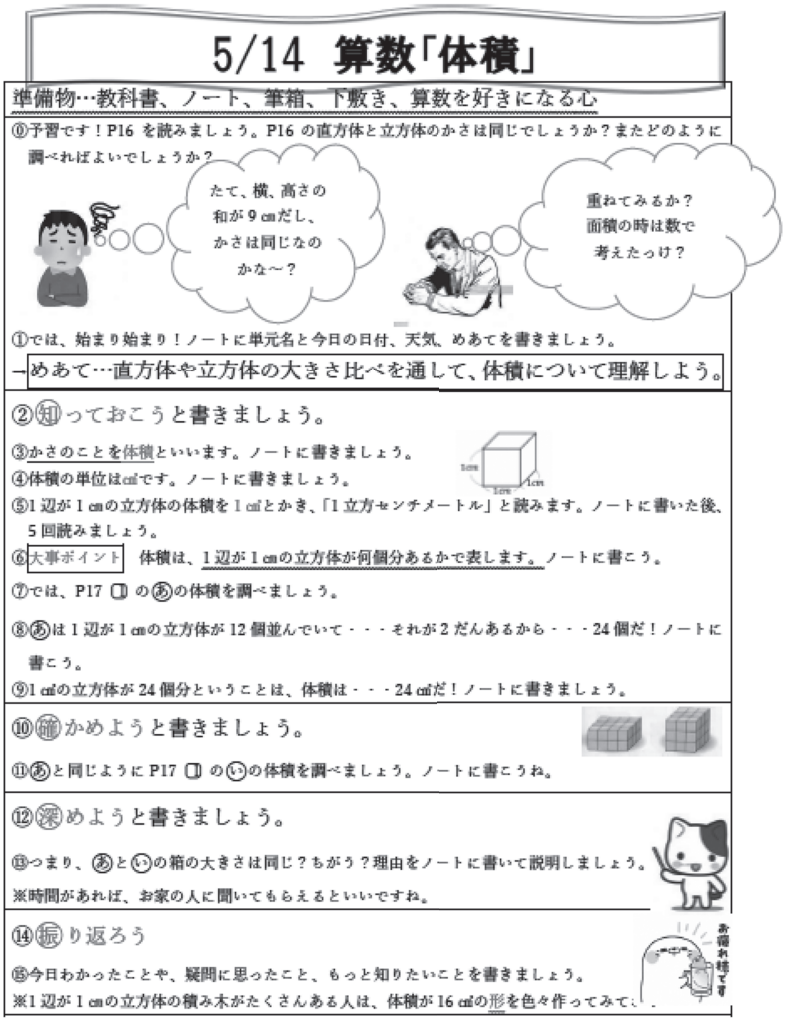
５年生のみなさん、元気に過ごしていますか？学校が再開して、早くみなさんと一緒に勉強がしたいです。さて、先生は４月から第二延山小学校にやって来ました。先生がどんな人かというと・・・好きな食べ物はハンバーグ！好きなスポーツはサッカー！好きな動物はウサギ！生き物や植物が好きなので電車の中ではよく本を読んでいます。「シマウマ」はどうしてあんなに目立つ白黒なの？「ナマケモノ」は本当になまけ者？「チューリップ」が１億円？世界は不思議に満ちていますが、どうやら理由があるようです。続きはみなさんに会ってからにしましょう！

５年１組担任：伊藤賢司

（注）「モ」は「モジュール学習」、「振り返り」は「学習の振り返り」のこと。

休校中の家庭学習にも、この「教えて考えさせる授業」のスタイルを取り入れていきました。言葉で説明するのは難しいのですが、教員が【毎時の学習の進め方】のプリントを作成するときに、「教えて考えさせる授業」を念頭に置きながら、子どもたちを前にして授業を進める感覚で「発話」や「指示」を文字にしていった、と言えばイメージしていただけるでしょうか。

資料２　【毎時の学習の進め方】の例（５月 14 日、５年生、算数）



5/14　算数「体積」

準備物…教科書、ノート、筆箱、下敷き、算数を好きになる心

⓪予習です！P16 を読みましょう。P16 の直方体と立方体のかさは同じでしょうか？またどのように調べればよいでしょうか？

たて、横、高さの和が 9 ㎝だし、かさは同じなのかな～？

重ねてみるか？面積の時は数で考えたっけ？

①では、始まり始まり！ノートに単元名と今日の日付、天気、めあてを書きましょう。

→めあて…直方体や立方体の大きさ比べを通して、体積について理解しよう。

②知っておこうと書きましょう。

③かさのことを体積といいます。ノートに書きましょう。

④体積の単位は㎤です。ノートに書きましょう。

⑤1 辺が 1 ㎝の立方体の体積を 1 ㎤とかき、「1 立方センチメートル」と読みます。ノートに書いた後、5 回読みましょう。

⑥大事ポイント　体積は、1 辺が 1 ㎝の立方体が何個分あるかで表します。ノートに書こう。

⑦では、P17 ❑ の㋐の体積を調べましょう。

⑧㋐は 1 辺が 1 ㎝の立方体が 12 個並んでいて・・・それが 2 だんあるから・・・24 個だ！ノートに書こう。

⑨1 ㎤の立方体が 24 個分ということは、体積は・・・24 ㎤だ！ノートに書きましょう。

⑩確かめようと書きましょう。

⑪㋐と同じように P17 ❑ の㋑の体積を調べましょう。ノートに書こうね。

⑫深めようと書きましょう。

⑬つまり、㋐と㋑の箱の大きさは同じ？ちがう？理由をノートに書いて説明しましょう。

※時間があれば、お家の人に聞いてもらえるといいですね。

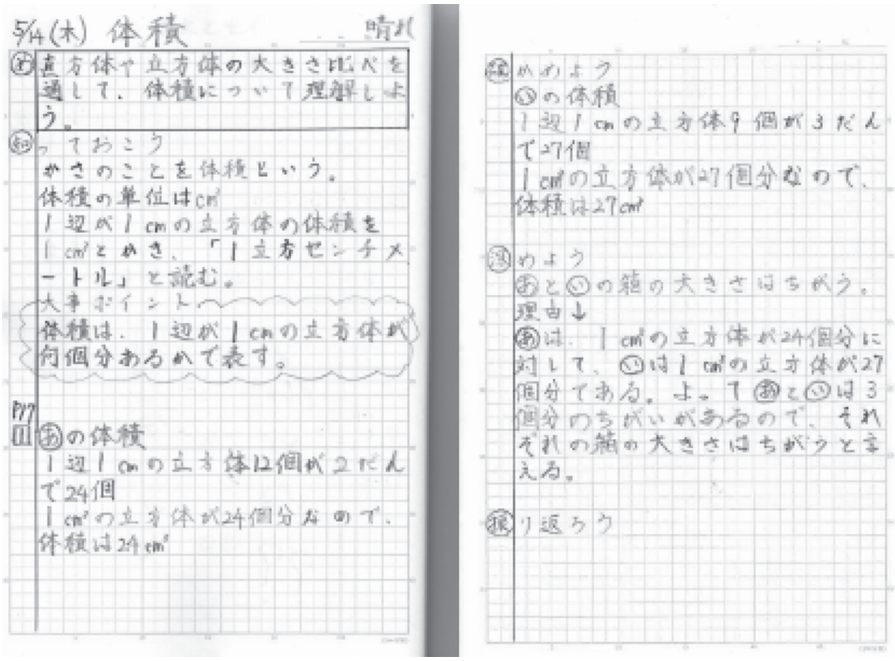
⑭振り返ろう

⑮今日わかったことや、疑問に思ったこと、もっと知りたいことを書きましょう。

※1 辺が 1 ㎝の立方体の積み木がたくさんある人は、体積が 16 ㎤の形を色々作ってみて

つまり、単に「○ページの○○の問題を解きなさい」と書くのではなく、その日の学習内容に大切なこと、教員が教えるべきポイントや課題を解くコツなどを「いつもの授業の雰囲気で、言葉にして伝える努力」を重ねていきました。例えば、【毎時の学習の進め方】では、この日の「体積」の学習の流れが明瞭になるように「ノートの取り方」（資料３）を例示しながら、子どもたちの学習を促しています。

資料３　【毎時の学習の進め方】で例示した「ノートの取り方」


5/4(木) 体積　晴れ

めあて　直方体や立方体の大きさ比べを通して、体積について理解しよう。

知っておこう
かさのことを体積という。
体積の単位はcm^3
1辺が1cmの立方体の体積を1cm^3とかき、「1立方センチメートル」と読む。
大事ポイント
体積は、1辺が1cmの立方体が何個分あるかで表す。

P77 11 あの体積
1辺1cmの立方体12個が2だんで24個
1cm^3の立方体が24個分なので、体積は24cm^3

練 めあて
いの体積
1辺1cmの立方体9個が3だんで27個
1cm^3の立方体が27個分なので、体積は27cm^3

決 めあて
あといの箱の大きさはちがう。
理由↓
あは、1cm^3の立方体が24個分に対して、いは1cm^3の立方体が27個分である。よって あといは3個分のちがいがあるので、それぞれの箱の大きさはちがうと言える。

振 り返ろう

Q2-4（井上）：興味深いお話ですね。休校中の学習と言えば、ICT を活用した遠隔授業が脚光を浴びましたが、プリント学習という、いわば従来のスタイルであっても、先生方の思いが伝わるような工夫がされていれば、子どもたちにとっては取り組み易く、学習効果も期待できる、ということなのですね。

滝渕校長が発行された「校長通信」を読ませていただきましたが、そこには、休校中の家庭学習に関して保護者のさまざまな声が載せられています。その中から典型的なものを２つ、資料として取り上げてみましょう。

資料４には「時間割に沿っての学習に大変苦戦」「とても悩み、イライラしてしまう自分がいる」という悩みが記されており、**資料５**では「学校の勉強スタイル、ノートの作り方が徹底して身についている」「子どもは先生の存在を近くに感じている」と高く評価されています。校長として、こうした声をどのような思いで聞き、また、そこに示されている問題にどのように対応されてきたのでしょうか。

資料４　保護者からのメール①

私は医療機関で働いており、そばで子どもの勉強をみてあげることができないため、時間割に沿っての学習に大変苦戦しております。現在の学習状況ですが、2人とも時間割があることで、決められた時間の中で取り組むといった意識は持ちながら学習できているように思います。問題は理解度です。仕事から帰ってきて子どもたちが取り組んだ内容を確認しますと、答えそのものが間違っているものがあるのはもちろん、問われている内容もよく理解できていないまま進めているものも見受けられます。大人から見れば、“これはこういうことじゃなくて、こういう意味で聞いている問題だ”など、当たり前に理解できることでも、4年生、2年生にしてみると、つまずきやすいポイントであったり、わからなくて当然の問題であるのか…など、どこまでを求めたらよいかとても悩み、イライラしてしまう自分がいる状態です。（後略）

（「令和2年度　校長通信　No.15号」、5月14日。下線は引用者。）

資料５　保護者からのメール②

スムーズにオンライン化ができないのは、日本の教育の思わぬ盲点であり、今後早急に対応を願うところです。その中での授業のように課題をこなしていくというこの試み。1週間が経ちますが、5年生の息子にはとても効果があり、よい刺激となっております。私は仕事をしていないので、同じ机に座り、様子を見ているのですが…。まず、親が考える以上に、学校の勉強スタイル、ノートの作り方が徹底して身についているので、先生からの指示にすぐに対応、理解ができておりました。『はいはい、こういうことね』といった調子で、二日目からは自分で進めるようになりました。こう書くと『もともと一人で勉強ができるんじゃないの？』と思われそうですが、いまだに『お母さん、辞書をひいて…』『計算するの、側で見ていて』と何かにつれて頼ってきていて、『いったい、学校ではどうしているんだろう？』と思うほどでした。しかし、学校ではそれなりに自分で学ぶ習慣をつけていたようです。次ぎに、学校との精神的な繋がりも感じられているようです。教科書をめくる、ノートに線を引く作業の中で、ほんの少しでも『学校』を感じているように思います。先生がご用意してくださったマニュアルは素人目に

もとても時間がかかっていると思いますが、そのご尽力の分、子どもは先生の存在を近くに感じています。（後略）
（「令和２年度　校長通信　No.18 号」、5 月 18 日。下線は引用者。）

A2-4（滝渕）：小学生が時間割にしたがって、一人で教科書を勉強していくことは、簡単なことではありません。【毎時の学習の進め方】は「普段の授業と同じようなやり方で展開されている」ので、高学年であれば、そこに書かれているようにやっていくことができますが、低学年の子どもは「指示されていること」の意味がわからないこともあるかもしれません。

始めたばかりの頃は、「もっとわかるように書いてほしい」とか、「他の家庭ではどのように取り組ませているのだろう」というような声をたくさんいただきました。そこで、校長通信で「家庭学習の工夫を共有しませんか」と保護者に働きかけ、情報交換やアイディアの共有を試みました。先ほど紹介してくださったメールも、その呼びかけに応えてくださったものです。

家庭学習に困っている児童や保護者を支援するという観点から、5 月 11 日（月）からは週に 1 回（9 時から 15 時）、児童が学校に来て担任等に質問ができる「質問タイム」をつくりました。毎回の参加者は10名程度でしたが、家庭学習で困っている子どもに教員が直接、支援や指導ができるようにしました。もちろん、それだけで「学力の保障」が十分にできるとは思いませんが、少しでも子どもたちが課題に向き合ってくれたら、家庭と学校とがつながることができれば、と考えていました。

Q2-6（井上）：先ほど、「自宅勤務」という話がありましたが、「休校」期間中、先生方の勤務はどのようなかたちだったのでしょうか。

A2-5（滝渕）：緊急事態宣言以降、教職員は原則として「自宅勤務」となりました。勤務開始時と終了時に、管理職に宛ててメールで報告をするきまりでした。自宅勤務で主に取り組んでもらったのは、さきほどもお話した「家庭学習の課題づくり」です。1 日あたり 4 時間分の授業の課題を 3 人の担任が分担して作成したのですが、子どもたちがひとりで学習して成果が上がるような「ガイドライン」を授業毎に作成しなくてはならないので、相当の時間がかかります。

１年生の担任や他校から異動してきた教員は、児童の顔と名前さえ一致しないような状態のなかで、「本当にこの課題でよいのか」と常に手探りだったと聞いています。子どもや保護者から「わかりにくい」といった声が聞こえたら即座に反応しなければなりませんので、学年団（同じ学年を組む教員チーム）の横の連絡は頻繁だったようです。学年団内での連携が進むにつれて、「家庭学習の課題づくり」は軌道に乗ってきたようですが、文字のやり取りだけでは、教員の思いが子どもたちに伝わりにくく、もどかしさも感じていたようです。

Q2-6（井上）：近年、「教員の多忙化」が問題とされてきましたが、休校で多忙な日常から解放され、先生方が「学校」や「教員の仕事」を普段とは異なる角度から見直すことができたならば、「禍転じて福となす」と言えると思うのですが、そうした点についてはいかがでしょうか？

A2-6（滝渕）：多くの教員が追われるような忙しさで仕事をしていますので、いわば強制的に「休校」、そして「自宅勤務」となったことで、普段はできない勉強をしたり、家族と共に過ごす時間が持てたということはあったと思います。他方で、自分のクラスの児童がどんなことに困っているか、児童の反応を見ながら支援するのが教員なのにそれができないことの歯がゆさ、もどかしさを感じたという声が多かったです。私自身、学校が「再開」した時に、改めて、学校は対面や集団でのコミュニケーションを通じて子どもたちの成長を育む場なのだ、との思いを新たにしました。

第３章　「再開」後の学校の状況

Q3-1（井上）：さて、5月25日に「緊急事態宣言」が解除され、6月1日から約3ヶ月ぶりに学校が再開されました。最初は「分散登校」で、いわゆる3密を避けたり、消毒や換気など安全面への配慮や児童の精神面へのケアが求められたり、相当なご苦労があったと拝察いたしますが、この時の学校の状況や課題はどのようなものだったのでしょうか。

A3-1（滝渕）：緊急事態宣言の解除が見込まれた時点で、教職員に対しては「登校再開に向けた準備のための、可能な限りの通常勤務」を命じました（5月21日）。児童の居場所づくりとして区教委から指示のあった「校庭・

図書室開放」の業務はPTA役員にお願いし、教職員には学校再開に向けた準備に勤務時間のすべてが充てられるように配慮しました。

再開時に想定した課題として、「不登校の増加」「（児童によっては）生活習慣の乱れ」「家庭環境の変化」などが頭にありましたので、「校長室だより（校長の課題意識を教職員に伝えるために適宜発行しているもの）」に整理して、職員夕会などで伝えるとともに、「児童理解の徹底」や「学校生活に期待や喜びを感じさせる取組（行事）の工夫」を求めました。

学校再開後の約1ヶ月は、登校する児童が約半分の「分散登校」でした。「学校生活に馴染めない児童が出るのでは」と心配し、保護者宛の「学校通信」にも「はじめの2週間は心と体の準備期間にあてましょう」と書いたのですが、学校再開を心から喜ぶ子どもたちが大変多く、思ったよりも円滑なスタートが切れました。区教委は「2ヶ月の休校期間を踏まえ、1単位時間を40分（1日7時間授業）にしてもよい」としましたが、本校では、これまで培ってきた学習スタイルを崩すことなく、授業の質の向上をめざす道を選び、45分（1日最大6時間）を貫くことにしました。

当初心配した「マスク忘れ」の児童はほとんどおらず、コロナ禍に対する児童や保護者の不安の大きさを確認できました。小学生は、2人集まれば密になるような行動特性を有していますが、感染リスクを少しでも軽減できるように、教室内の机の間隔を広げ、校庭遊びは上履きのままでもOKに、そして、休み時間に校庭へ出るルートを分散する、などの工夫も行いました。

Q3-2（井上）：公立学校のICT環境の整備が遅れているという話がありましたが、学校が再開されてから、第二延山小学校ではZoomなどを積極的に活用していこうとされていますよね。その辺りについても、お話いただけますか。

A3-2（滝渕）：はい。メディアで公立学校のICT環境の不備が大きく取り上げられたこともあり、6月半ばから品川区立小学校でもZoomが使えるようになりました。本校にICTに詳しい教職員がいたこともあり、手始めに、職員室のPCと教室のPCとをZoomでつないで、校内放送の代わりに全校朝会や集会をZoomでやってみました。

私自身が必ずしもICTが得意なわけではないのですが、こうした状況だ

からこそ、「効果を期待できるなら、なんでも使っていこう」という思いを教職員と共有してチャレンジしました。「声だけでなく、顔が見える」ということに可能性を感じていますし、児童の反応も良いようです。2学期には、行事の映像をYouTubeで家庭に配信したり、保護者会をZoomで行ったりと、半年前には想像すらできなかったくらいに活用場面が増えました。

第4章　「できない」ではなく、「どうやるか」の視点で

Q4-1（井上）：例年よりも短い夏休みを経て、8月24日に2学期が開始されました。通常であれば、2学期は子どもたちもクラスに慣れ、さまざまな行事や活動が活発におこなわれる時期です。しかしながら、今年度は「休校」があったので「授業時間」を確保することが優先され、例年通りには行事ができなかったとお聞きしますが、実際のところはどうだったのでしょうか。

A4-1（滝渕）：学校「再開」の見通しが立った頃、私は教職員に「学校生活への期待と喜びを持たせる取組の工夫」を考えてほしいと求めました。コロナへの感染防止を重視しながらの教育活動は、例年通りにはいかないことは予測されましたが、「何もしない学校で子どもたちは育つのか」と問い続けました。私なりの結論は、「準備の時間がとれないから、感染リスクが高まるから、行事は無理だ」と諦めるのではなく、「どうやったらできるのか」「どんなことが児童の育ちにつながるのか」を考え、可能な限りやっていこう、ということでした。

Q4-2（井上）：コロナ禍ですから、いろんな制約やご苦労があったことと推測しますが、どのように実施されたのでしょうか。具体的な事例をお話いただけますでしょうか。

A4-2（滝渕）：「できない行事」の代表は、運動会でした。650名の児童と1000名を超える保護者が、たとえ屋外であっても、一堂に会する状況をつくることはできません。けれども、運動会は児童も保護者も楽しみにしている花形行事ですから、「コロナだからできない」で済ますわけにもいきません。そこで、これまでの運動会とは一線を画して「スポーツフェ

ス」と名称を改め、やり方を工夫することにしました。まず、密を避けるために、「学年ごとの実施」としました。また、「授業時間の確保」という観点から、準備に時間のかかる「表現運動（ダンスなど）」は止めて、練習時間がそれほど必要のない「団体競技（綱引きや大玉転がし、玉入れなど）」を中心に、一人あたり3回参加できるようにしました。学年ごとに実施するので、6年生は低学年（1〜3年生）の裏方として運営に携わりました。4・5年生は、もう高学年ですから、自分たちで進行などの係もすべて行い、これまでとは違った充実感を味わった児童が多かったようです。

一方、「感染防止」の観点から中止した活動もあります。「二延まつり」という集会行事です。各学級が「ゲームコーナー」などを出展し、全校生徒がそれぞれのコーナーで遊ぶという楽しい行事なのですが、密になることが明らかなので見送りました。伝統のおまつりがなくなるのはさみしいな、と思っていたところ、図工担当からは「作品展」、音楽担当からは「音楽会」を開催したいという提案がありました。どちらも「授業時間内を使って準備ができる」ということでしたので、本校では初めての企画でしたが、校長としてゴーサインを出し、11月に「作品展」、12月に「音楽会」を開催しました。音楽会は、広い会場で演奏者も観客も十分に間隔を取り、マスクを着用したままでの合唱でした。感染リスクを軽減するため低・高学年別に開催し、保護者にはYouTubeで配信するなどの工夫をしました。

Q4-3（井上）：親御さんや子どもたちの反応はいかがでしたか？

A4-3（滝渕）：運動会は保護者からの人気も高いので、中止することへの反応が気になっていましたが、おかげさまでスポーツフェスは大好評でした。ウイークデイの実施にもかかわらず、どの学年も200名以上の保護者の参観がありました。コロナへの感染リスクを考えて、学年あたりの実施時間を2時間以内に収め、保護者も「わが子（学年）の種目」だけを参観するという方式にしたのですが、「今年のやり方はコンパクトでよかった」という声が大変多かったです。表現活動ができなかったことは残念でしたが、競技種目が増えましたので、児童の活躍の場面が多くなりました。「赤白の応援合戦」も盛り上がりました。ある6年生のアイディアで、ガレリア（校舎を入った正面の広い空間）の床に「得点ボード」を広げて、

各階の廊下から見えるようにしたのですが、子どもたちは「得点」が表示されるたびにのぞき込み、臨場感を高めていました。

「作品展」は、学年ごとに参観時間を振り分け、密を防ぎながら開催した本格的な展覧会となりました。保護者からも、生徒からも、「また来年も見たい」という感想がたくさん寄せられました。「音楽会」も、感染リスクを軽減するために低・高学年別に実施しましたが、結果的に他学年の演奏をじっくりと鑑賞することができ、「高学年になったら、自分はあれをやりたい」というような感想が聞かれました。保護者からは、「YouTubeでの配信でも雰囲気は十分伝わってきた。コロナのことを考えると、安心して鑑賞できたのはよかった」という声が寄せられています。

Q4-4（井上）：ややセンシティブな質問をさせていただきますが、児童や保護者にコロナへの感染が確認された事例はなかったのでしょうか。もし、あったとすれば、どのような対応をされたのでしょうか。差し支えのない範囲でお答えいただければ幸いです。

A4-4（滝渕）：夏過ぎまでは、各種の報道で「感染者数」を聞いても今一つピンときませんでしたが、9月の後半に「児童の保護者が感染した」という情報が入ってからは一変しました。児童は「濃厚接触者」と認定され、検査の結果は陰性でしたが、2週間の自宅待機となりました。「休みの間の家庭学習の手配」や「欠席していることを周囲にどう説明するか」など配慮を要することが多くありました。また、仮に児童の感染が判明した場合、「校内の濃厚接触者の洗い出し」のための調査にかなり手間がかかることも、対応を重ねるたびにわかってきました。当たり前のことですが、改めてマスクの着用や接触行動をできるだけ減らす工夫などが、児童を守るだけでなく、学校という組織を守ることにつながることがよくわかりました。

Q4-5（井上）：品川区では「校区教育協働委員会」という仕組み（品川区版「コミュニティ・スクール」）[*4]を設けて学校と地域の連携・協働に積極的ですが、今回のコロナ禍で、学校と地域の関係において何か新しい動きはみられたのでしょうか。

A4-5（滝渕）：例えば、区教委は「休校が続いているから、児童の居場所の確保として学校を活用しよう」と考えたとします。そうした発想自体は当

然だと思いますが、誰がその活動を担うかまではなかなか考えてはくれません。どうかすると、教職員がいるではないかとなってしまうでしょうし、実際、教員がそうした役割を担った学校は多くあったようです。

学校再開を目前とした5月末頃、私は、教職員には「学校再開の準備」に全力で当たらせたいと考え、それ以外のこと（例えば、校庭・図書室開放の受付業務など）にはPTA役員の力を借りました。学校再開後、校内の消毒が義務化された時にも、教職員は「児童の指導」に全力を注ぐべきだと考え、用務主事と地域の方の力を借りて「コロナ・バスターズ」という名の校内消毒作業チーム（10名のボランティア、火・金に活動）を結成し、消毒作業に当たっていただきました。「コロナ・バスターズ」の結成には、学校地域コーディネーター[*5]が大きく関わっています。校区教育協働委員会は教育活動の充実に大きな力を与えて下さっていますが、今回のような学校がピンチの時に臨機応変に力を貸していただけることは校長としてとても心強いです。

Q4-6（井上）：最後に、さまざまな対応を迫られたこの1年を振り返って、いわゆるWithコロナ、Afterコロナの時代に、学校はどのような変化が必要と思われますか。反対に、「変わらないこと」あるいは「変えてはならないこと」があるとすれば、それはどのようことなのか、お聞かせいただけますでしょうか。

A4-6（滝渕）A14：今回のコロナ禍を通して、改めて学校教育について考えるよい機会になりました。すでに明らかになっている今後の大きな変化は、年度内に「GIGAスクール構想」[*6]によるPC端末が全児童に配備されることです。それをどう活用していくかを考えることは、これからの教育活動の充実に向けては大変重要ですが、だからと言って、小学校がオンライン中心の教育活動になるとは思いません。改めて、対面でなければできない、質の高い教育が求められると考えます。なので、PC端末は対面授業で有効に活用することを第1に考え、あわせて、児童には家庭に持ち帰らせ、連絡ツールとして使っていきたいと思います。

また、運動会をはじめこれまでの学校行事を見直さざるを得なかった中で、児童にとって何が大切なのかを考えながら、教育活動を計画していくことの大切さを痛感しました。たとえコロナ禍が去ったとしても、単純

に「元に戻る」ことはないと思います。働き方改革も求められていますので、来年度は「通知表発行回数の改訂」「モジュール授業の廃止による下校時刻の繰り上げ」という2つの改革を柱にしながら、「教えて考えさせる授業」のさらなる充実と各学校行事の創意工夫をしていこうと考えています。

結びにかえて

令和2年度の最後の校区教育協働委員会（2021年2月19日）で、今年度の教育活動の振り返りをおこなった。その際、筆者（井上）が「学習の遅れへの対応」について質問をしたところ、意外にも、「教育課程上の学習の遅れはほとんどない」とのことであった。種明かしをすれば、長期休みを短縮したことに加えて、これまでは学校行事の準備のために授業がカットされてきたが、今年度は行事そのものが削減されたので、2ヶ月間の「休校」にもかかわらず、例年の授業時数の95%を確保できた、ということである。もちろん、「授業時数の確保」は「学力の保証」とイコールではない。それでも、「休校」分を取り戻さなくてはならないという意識が、教員にも子どもたちにもあったことで、「授業への集中」がみられたようである。

他方で、多くの教員は「授業は埋め合わせができても、目に見えないところで、埋め合わができていないとことがある気がして心配だ」、「子どもは、子どもになりに無理をしているような感じがする」との危惧を隠せないでいる。保護者も「コロナ禍で子どもも親も知らず知らずにストレスをため、家庭の雰囲気がおかしくなっていた」、「保護者同士の情報交換ができなかった」と振り返り、地域住民からは「例年できていた児童と地域との交流がほとんどできず残念であった」という声があがっていた。

コロナ禍の影響はすぐに明らかになるものばかりとはかぎらない。特に、子どもの学力や育ちに与える影響については長期的な視点から考えていくことが必要だろう。ただ校長が述懐するように、今回のコロナ禍が「改めて学校教育について考える機会」となったことは疑いない。第二延山小で行われた対応のなかでは、①休校中に子どもたちに学習させるプリントづくりにおいて、学校全体で研究を進めてきた「教えて考えさせる授業」を念頭に、そ

れぞれの担任教員が「子どもたちを前にして授業を進める感覚」で「発話」や「指示」を工夫していったこと（【毎時の学習の進め方】、【一週間の時間割】など）、加えて、②家庭学習中の子どもや保護者の不安や困りごとを解消するために、「校長通信」で保護者間の情報交換やアイディア共有を促し、あるいは、児童が学校に来て担任等に質問ができる「質問タイム」をつくる、といった試みは特筆に価しよう。これらは、遠隔授業をしたくてもできない状況下での「苦肉の策」ではあるが、たとえICT環境が万全であっても、それだけで理想の教育が実現するわけではないことを予見させてくれる。つまり、紙のプリントがiPadに替わったとしても、同じような問題は必至であり、教員のセンスと工夫が求められるのである。第二延山小学校の「教えて考えさせる授業」がGIGAスクール構想によってどのように深化・発展していくかを期待したい。

もう１つ、感染防止のために多くの学校行事が従来通りのかたちではできなくなったときに、校長が子どもたちに「学校生活への期待と喜びを持たせる」ために、③「できない」ではなく、「どうやるか」の視点で学校行事を見直していった、という観点も重要である。児童の発達段階を考えるとき、小学校教育がオンライン中心で成り立つとは思えない。そのためにも、私たちは「対面でなければできない教育」とはなにかを突き詰めていかなければならない。

コロナ禍によって、当たり前だったこと・変わらないと思っていたことが変わりつつある。学校から長期にわたり、子どもの姿が消えた。教員も、多くの保護者も「在宅勤務」経験した。公立学校でも、「YouTubeを介しての授業配信や参観」や「Zoomによる保護者会」などが試行され、すべての児童にICT端末が配布されることとなった。楽観はできないが、学校を替えるチャンスととらえるべきであろう。そのためにも、コロナ禍によって顕在化した「学校教育の本質的な問題」を教職員だけでなく、保護者、地域住民も交えて、大きな視座から考えていきたい。

【付記】

本研究は、科学研究費補助金（JSPS20K02466）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

＊1　日本経済新聞社「新型コロナウイルス感染　世界マップ」
(https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-world-map/)
2021 年 2 月 21 日閲覧

＊2　ヒアリングは、2020 年度に開催された 5 回の第二延山小学校校区教育協働委員会（7 月 10 日、9 月 23 日、10 月 16 日、12 月 3 日、2 月 19 日）の前後の時間に、校長室で行った。本稿は、そのヒアリングの内容を文章化したのち、井上がメール等で滝渕校長に適宜、確認をしながら、再度、全体を整えたものである。また、「はじめに」と「結びにかえて」は井上による。なお、井上は校区協働教育委員会の委員長（任期：平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日）という立場にある。

＊3　「教えて考えさせる授業」は、認知心理学者の市川伸一氏らが提唱する授業設計の理論であり、1 回の授業の流れを「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」の 4 段階の枠組みとらえる点が特徴である。「教師が教材・教具を工夫してわかりやすく教え、児童・生徒が基本的な知識を共有することによって」こそ、「有効な協同的問題解決やコミュニケーション活動ができる」と考え、また、「個々の授業における子どもの困難度を考慮して、教える工夫、考えさせる工夫を入れるという授業づくり」が重視される。（市川伸一、植阪友理編著『最新　教えて考えさせる授業　小学校　深い学びとメタ認知を促す授業プラン』2016 年、図書文化社、2 頁）

＊4　品川区教育委員会は、平成 28 年度から平成 30 年度にかけて、全区立小学校・中学校・義務教育学校（全 46 校）を「品川コミュニティ・スクール」に指定した。この施策は「保護者、地域住民、学識経験者等が学校運営に参画することで、学校と地域住民が一体となって、継続性を保ちながら、教育活動の改善や児童・生徒の健全育成に取り組み」「地域全体で学校教育を支援することで、学校の教育活動の充実を目指すとともに、地域の人材の有効活用や地域の教育力の活性化を図ります」（品川区教育委員会「品川コミュニティ・スクール～地域とともにある学校づくり～」平成 31 年 3 月）とあるように、国の制度である「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」とほぼ同様のねらいと内容で進められている。品川コミュニティ・スクールの特色は、学校運営に参画する「校区教育協働委員会」と実際に教育活動を支援する「学校支援地域本部」の 2 つを設置し、それぞれの組織の運営に関わり、学校と地域をつなぐ「学校地域コーディネーター」が各校に配置されている点にある。なお、「校区教育協働委員会」の役割は「学校運営の基本方針を承認する」「教育活動の評価をする」「区費教職員等の活用に関する意見を述べることができる」「学校支援活動の企画・調整をする」の 4 つである。

＊5　「品川区学校支援地域本部事業実施要綱」（平成 28 年 3 月 31 日制定、令和 2 年 3 月 17 日改正）の第 4 条において、「学校地域コーディネーター」の配置や活動内容が以下のように定められている。

（学校地域コーディネーター）

第 4 条　学校支援活動等の実施に関して総合的な調整を行うため、各地域本部 および教育委員会事務局指導課に、学校地域コーディネーター（以下「コーディネーター」という。）を配置する。

2　コーディネーターは会計年度任用職員とし、その任用、分限、服務、報酬等は、別に定める。

3　コーディネーターは、学校および地域の現状を十分に理解し、職務の遂行に必要な知識・能力を有する者のうちから、選考により、教育委員会が任用する。

4　コーディネーターの任用期間は、年度を単位とし、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

5　各地域本部のコーディネーターの活動内容は、次に掲げるとおりとする。

(1) 学校支援活動等の実施に関する総合的な調整に関すること。
(2) 学校と学校支援ボランティア等との連絡・調整に関すること。
(3) 学校と地域との連絡・調整に関すること。
(4) 学校と協働委員会との連絡・調整に関すること。
(5) 学校の支援ニーズの把握に関すること。
(6) 学校支援ボランティア等の募集、登録および配置に関すること。

(7) 活動プログラムの企画に関すること。
(8) 前各号に掲げるもののほか、各地域本部の活動の円滑な運営と効果的な実施のために必要な事項に関すること。

6　教育委員会事務局指導課のコーディネーターの活動内容は、次に掲げるとおりとする。
(1) コーディネーター間の連絡・調整に関すること。
(2) コーディネーターの確保・人材育成に関すること。
(3) 各地域本部の効率的な活動体制の構築支援に関すること。
(4) 各地域本部の活動の支援に関すること。
(5) 前各号に掲げるもののほか、各地域本部の活動の円滑な運営と効果的な実施のために必要な事項に関すること。

＊6　2019 年 12 月、文部科学省は「GIGA スクール構想」を公表し、「1 人 1 台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する」（文部科学省リーフレット「GIGA スクール構想の実現へ」）とした。日本経済新聞によれば、「23 年度末までに端末を整え、24 年度以降はデジタル教科書の導入や学習履歴の管理などに活用する計画だった」が「新型コロナウイルスによる長期休校を受け、政府は 20 年度末までに端末配備を終えるとし、同年度補正予算に 2292 億円を盛り込んだ。前倒しに伴い、各自治体はデジタル端末を使って教えられる教員の育成や、情報漏洩などのセキュリティー対策を急いで進める必要に迫られている。」（「日本経済新聞」2021 年 1 月 1 日、朝刊）なお、第二延山小学校では 2021 年 2 月 19 日に全校児童数分の iPad が届き、3 月上旬まで児童に配布された。